

歴代誌第二10-13章「へりくだりにある救い」

1A 弱くなる国 10-12

1B 分裂 10

1C 若者の助言 1-11

2C 約束の実現 12-19

2B 立て直し 11

1C 御心への服従 1-4

2C 町々の防備 5-23

3B 従属 12

1C 諸国の支配 1-12

2C 主を求めない悪事 13-16

2A 主への叫び 13

1B 主への反逆 1-12

2B ユダの勝利 13-22

本文

歴代誌第二 10 章を開いてください。私たちは、ソロモンが死んだ後のユダの姿を見ていきます。ソロモンの治世において、イスラエルの国が神の約束されたとおりの、諸国の中の注目の的、引き上げられた国になった時代を私たちは読みました。礼拝王国と言ってもよいでしょうか、主を礼拝することを中心にした国に、神は平和と繁栄を与えられました。けれども、それが長続きしなかった話が、10 章から始まります。実に、ソロモンの死後すぐにこの大国が分裂します。

1A 弱くなる国 10-12

1B 分裂 10

1C 若者の助言 1-11

10:1 レハブアムはシェケムへ行った。全イスラエルが彼を王とするため、シェケムに来ていたからである。10:2 ネバテの子ヤロブアムがそのことを聞くと、..彼はソロモン王の顔を避けて逃げて行き、エジプトにいたのである。..ヤロブアムはエジプトから戻って来た。10:3 人々が使いをやって、彼を呼び寄せたので、ヤロブアムは全イスラエルとともにやって来て、レハブアムに言った。10:4 「あなたの父上は、私たちのくびきをかたくしました。今、父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびきを軽くしてください。そうすれば、私たちはあなたに仕えましょう。」10:5 すると、彼はこの人々に、「もう三日したら、私のところに戻って来なさい。」と言った。そこで、民は出て行った。

ソロモンが死んだ後に、レハブアムはシェケムに行っています。シェケムは、イスラエル国の真ん中に位置します。覚えていますか、ヨシュアたちが約束の地に入った時に、そこからモーセの律法の書を宣言しました。王の即位にはふさわしいところです。けれども、ソロモンの家臣のヤロブアムがソロモ

ンの生前、彼に反抗して、エジプトに逃れていました。イスラエルの人々が彼を呼び寄せました。ヤロブアムは人気ある政治家だったのです。

そしてソロモンが課していた重税を軽くしてくださいと要求しています。ソロモンが建築事業を盛んに行ってたことを思い出してください。その費用がイスラエルの民に重く押しかかっていたのです。ソロモンの後世には、世俗化が進んでいました。主を愛していたソロモンですが、外国の女を数多くめとって、彼女らに心が逸れていきました。そして膨大な富の中で、主と心が一つになっていませんでした。そこで進んできたのが世俗化であり、ソロモンは神の支配を受けるのではなく、他の人間の支配者と同じようになっていったのです。覚えていますか、イスラエルの民が王をサムエルに求めた時に、王はあなたがたに重い徴税を行い、また兵役や労働の徴用を行うと警告しました(1サムエル 8 章)。私たちが主の支配から離れる時に、必ず起こるのが人による支配、そして抑圧があります。

10:6 レハブアム王は、父ソロモンが生きている間ソロモンに仕えていた長老たちに相談して、「この民にどう答えたらよいと思うか。」と言った。10:7 彼らは王に答えて言った。「もし、あなたがこの民に優しくし、彼らに好意を示し、彼らに親切なことばをかけてやってくださるなら、彼らはいつまでもあなたのしもべとなるでしょう。」10:8 しかし、彼はこの長老たちの与えた助言を退け、彼とともに育ち、彼に仕えている若者たちに相談して、10:9 彼らに言った。「この民に何と返答したらよいと思うか。彼らは私に『あなたの父上が私たちに負わせたくびきを軽くしてください。』と言って来たのだが。」10:10 彼とともに育った若者たちは彼に答えて言った。『あなたの父上は私たちのくびきを重くした。だから、あなたは、それを私たちの肩から軽くしてください。』と言ってあなたに申し出た民に、こう答えたらいいでしょう。あなたは彼らにこう言いなさい。『私の小指は父の腰よりも太い。10:11 私の父はおまへたちに重いくびきを負わせたが、私はおまへたちのくびきをもっと重くしよう。私の父はおまへたちをむちで懲らしめたが、私はさそりを使うつもりだ。』と。」

この「さそり」とは、金属の破片が入っている鞭の別称です。レハブアムが知らなければならなかったのは、民がソロモンのしもべになっていたのは、あくまでもソロモンに主が油注がれ、その国を強くしてくださったから、ということです。主が建てるのでなければ、その働きはむなしなのです。靈的に力を失っているのであれば、それに合わせた統治があります。その靈的な弱体化を、ソロモンに仕えていた長老たちは知っていました。それで、分相応の支配をしなければいけないことを助言しました。けれども、レハブアムは気づいていません。その靈的側面に気づいておらず、強引に民を治めようとしてました。そして午前礼拝で話しましたが、その鈍感さは彼が主を求めていないことから来ています。ここで祈っていれば、主がその分別を与えてくださったはずですが。

2C 約束の実現 12-19

10:12 ヤロブアムと、すべての民は、三日目にレハブアムのところに来た。王が、「三日目に私のところに戻って来なさい。」と言って命じたからである。10:13 王は彼らに荒々しく答えた。レハブアム王は長老たちの助言を退け、10:14 若者たちの助言どおり、彼らに答えてこう言った。「私はおまへたちのくびきを重くする。私はそれをもっと重くしよう。私の父はおまへたちをむちで懲らしめたが、私はさそり

を使うつもりだ。」10:15 王は民の願いを聞き入れなかった。それは、かつてシロ人アヒヤを通してネバテの子ヤロブアムに告げられた約束を主が実現するために、神がそうしむけられたからである。

レハブアムが長老たちの助言を退け、若者たちの助言どおりに行ったのは彼に知恵が欠けていたのは言うまでもありません。けれども、ここに書いてあるように、ヤロブアムに対してアヒヤがイスラエルの十部族を彼に与えると約束したとおりに事が実現したのです(1列王 11:29-36)。その理由は、ソロモンが主を捨てて他の外国の神々を拝んだからだ、と言っています。ソロモンの行なったことへの結果を、レハブアムの知恵のなさを通して実現したのです。

10:16 全イスラエルは、王が自分たちに耳を貸さないのを見て取った。民は王に答えた。「ダビデには、われわれへのどんな割り当て地があろう。エッサイの子には、ゆずりの地がない。イスラエルよ。おのおのあなたの天幕に帰れ。ダビデよ。今、あなたの家を見よ。」こうして、全イスラエルは自分たちの天幕へ帰って言った。10:17 しかし、ユダの町々に住んでいるイスラエル人は、レハブアムがその王であった。10:18 レハブアム王は、役務長官ハドラムを遣わしたが、イスラエル人は、彼を石で打ち殺した。それで、レハブアム王は、ようやくの思いで戦車に乗り込み、エルサレムに逃げた。10:19 このようにして、イスラエルはダビデの家にそむいた。今日もそうである。

イスラエルが答えた言葉は、かつてアブシャロムがダビデに反抗し、アブシャロムが死んだ後にイスラエルとユダの間に激しい確執が起こった時にイスラエルの者たちが語った言葉と同じであります。シェバというよこしまな者が、その対立の間に立ち入り、この言葉を言ってイスラエルを自分に引き寄せて、ダビデから引き離しました(2サムエル 20:1)。この時から分裂の危険性は潜在的に存在していました。その古傷が今、レハブアムによって完全に開いてしまい、修復不能になったのです。

ソロモンの治世による平和と繁栄は、こんなにも早く崩壊してしまいました。平和ではなく分裂が起こってしまいました。レハブアムの判断は知恵がありませんでしたが、彼が何かを言ったからというよりも、ソロモンが晩年に主の心から離れてしまったところに原因があります。キリストの教会がなぜ分裂してしまうのか、キリストは平和であられる方なのになぜ一つになれないのか？それは、単なる意見調整や人間の知恵によっては解決しません。むしろ主を追い求めることによってもたらされます。ソロモンが主に願ったので、彼に知恵が与えられました。同じように、私たちがこの世のものから離れ、主のみを神とする時に、私たちキリスト者の間に平和を保つことができます。

2B 立て直し 11

1C 御心への服従 1-4

レハブアムが、ヤロブアムの反逆が主に拠るものであることを知るのは、もっと後になってからです。預言者を主は遣わしてください。

11:1 レハブアムはエルサレムに帰り、ユダとベニヤミンの家から選抜戦闘員十八万を召集し、王国をレハブアムのもとに取り戻すため、イスラエルと戦おうとした。11:2 すると、神の人シェマヤに次のよう

な主のことばがあった。11:3「ユダの王、ソロモンの子レハブアム、および、ユダとベニヤミンに属する全イスラエルに告げて言え。11:4『主はこう仰せられる。上って行ってはならない。あなたがたの兄弟たちと戦ってはならない。おのおの自分の家に帰れ。わたしがこうなるようにしむけたのだから。』」そこで、彼らは主のことばに聞き従い、ヤロブアムを目ざして進む行軍を中止して、引き返した。

シェマヤが来るまでは、レハブアムは王としてその常識の範囲で動いていました。国に反逆する分子を鎮圧せねばイスラエルの分裂を阻止できません。それで十八万人もの選抜戦闘員を召集しました。けれども、シェマヤが神の言葉を伝えます。この離反は、主が仕向けられたものであるということです。そして、大事なのは彼らが「主のことばに聞き従」ったことです。

分裂というのが、どうして主によるものなののでしょうか？一致と統一が主の御心ではないですか？と問う人がいるかもしれません。レハブアムがまさにそう思っていました。国の統一は当たり前である、と思っていました。けれども、分裂が起こるのを許したのは主ご自身なのです。主は、私たちがこの方から目を離してしまう時に、私たちを低くされます。そして、その低くされたところから主を呼び求めることを願っておられます。教会は、あるいはクリスチャンはこうあるべきだという理想を掲げて、肝心要の主との関係が疎かにされているのなら、教会が低められることを神は許されるのです。そして、そこから主は私たちが建て直してくださるのです。「ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。(1ペテロ 5:6)」

2C 町々の防備 5-23

11:5 レハブアムはエルサレムに住み、ユダの中に防備の町々を建てた。11:6 すなわち、ベツレヘムとエタムとテコア、11:7 ベテ・ツルとソコとアドラム、11:8 ガテとマレシャとジフ、11:9 アドライムとラクシュとアゼカ、11:10 ツォルアとアヤロンとヘブロン。これらはユダとベニヤミンの中にあり、防備の町々であった。11:11 さらに、彼は防備を固めて、その中に隊長を置き、糧食、油、ぶどう酒をたくわえた。11:12 またすべての町ごとに大盾と槍を置き、これらの町をますます強固にした。こうして、ユダとベニヤミンは彼の側についた。

レハブアムは、国の強化に励みました。これら防備の町々は、敵が侵入してこないように、地理的に戦略的なところにある町々です。シェフェラと呼ばれる、ユダの山地とペリシテ人の平野の間にある町々もここに多く登場します。こうして、ユダとベニヤミンだけの国が固められました。けれども、画期的には次の動きです。

11:13 イスラエル全土の祭司たち、レビ人たちは、あらゆる地域から出て来て、彼の側についた。11:14 実は、レビ人は自分たちの放牧地と所有地を捨てて、ユダとエルサレムに来たのである。ヤロブアムとその子らが、主の祭司としての彼らの職を解き、11:15 自分のために祭司たちを任命して、彼が造った高き所と雄やぎと子牛に仕えさせたからである。11:16 さらに、彼らのあとに続いて、イスラエルの全部族の中から、その心をささげてイスラエルの神、主を尋ね求める者たちが、その父祖の神、主にいけにえをささげるためエルサレムに出て来た。11:17 彼らは三年の間、ユダの王権を強固

にし、ソロモンの子レハブアムを励ました。三年の間、彼らがダビデとソロモンの道に歩んだからである。

なんと、北イスラエルにいる祭司とレビ人たちがユダとエルサレムに来ました。また一部のイスラエル人たちもユダに移ってきました。まず祭司についてですが、ヤロブアムが金の子牛をベテルとダンに置いて、そこでヤハウエをその子牛を通してあがめさせようとしていました。そして、レビ人ではないのに、勝手にその祭司としていきました。それで彼らは自分たちに割り当てられていた町々を離れて、エルサレムにやってきたのです。そして、北イスラエルにイスラエルの神、主を尋ね求める者たちも、ヤロブアムの金の子牛ではなく、エルサレムに来て主にいけにえを捧げたのです。これらレビ人や神を敬うイスラエル人たちが、ヤロブアムの支配を受けていたにも関わらず、レハブアムを励ましたのです。思い出してください、この歴代誌はバビロンからの帰還民が礼拝中心の国民生活を取り戻すために、過去の神の取り扱いを思い出すために記録したものです。異邦人の支配の中にあっても、優先するのはイスラエルの神を礼拝するのだ、という決意を表しています。

私たちに、他の周りの人々が主の命じられていることと反対の方向に進んでいる時に、「いや、私は主が命じられたように神を礼拝する。」という意志を貫くことができるでしょうか？そして、自分の支配者が金の子牛を拝むように仕向けているのに、それでも真の神をあがめるために人の支配に背を向けることはできるでしょうか？主は、「わたしの他に、他の神々があってはならない。」と命じられました。新約聖書でも、キリスト者に対して偶像礼拝を避けなさいと命じられました。それがたとえ、家族や親族の意向と抗うことになっても、神に対して従順になる用意はできていますか？使徒ペテロは、「人に従うより、神に従うべきです。(使徒 5:29)」と言いました。

11:18 レハブアムは、ダビデの子エリモテとエッサイの子エリアブの娘アビハイルとの間にできた娘マハラテをめぐって妻とした。11:19 彼女は彼に男の子を産んだ。エウシュ、シエマルヤ、ザハムである。11:20 彼女をめぐって後、彼はアブシャロムの娘マアカをめぐった。彼女はアビヤとアタイとジザとシェロミテを産んだ。11:21 レハブアムは彼のすべての妻、そばめにまさってアブシャロムの娘マアカを愛した。彼は妻を十八人、そばめを六十人持っており、二十八人の息子、六十人の娘をもうけた。11:22 レハブアムはマアカの子アビヤを立ててかしらとし、彼の兄弟たちの間でつかさとした。彼を王にしようと考えたからである。11:23 彼は賢く事を行ない、その子どもたちを全部、ユダとベニヤミンの全土、すなわちすべての防備の町々に分散させたいえ、彼らにたくさんの食糧を供給し、多くの妻を捜し与えた。

一国の王らしく、彼は多くの妻とそばめを持ちました。これは人間的に考えれば、王朝がしっかりとした王族となるためには必要な行為であります。このことによって多くの息子と娘が生まれました。しかも、王位継承のために彼は他の兄弟をエルサレムから引き離して、かつその兄弟たちにも多くの食料と妻を与えたので不満を抱くことがないようにさせました。このようにレハブアムの治世は、初めの三年間は好調に進みました。しかし、次のことが起こります。

3B 従属 12

1C 諸国の支配 1-12

12:1 レハブアムの王位が確立し、彼が強くなるに及んで、彼は主の律法を捨て去った。そして、全イスラエルが彼にならった。

主の言葉に聞き従うことのできたレハブアム、そして祭司やレビ人、また神を敬うイスラエル人がやってきて彼を励ましたのですが、国が強くなるに及んで、最もしてはならないことをしました。主の律法を捨て去ったのです。具体的には、列王記第一に書いてある通り、偶像礼拝を行うようになりました。そこでユダの民もそれに倣いました。

12:2 レハブアム王の第五年に、エジプトの王シシャクがエルサレムに攻め上って来た。彼らが主に対して不信の罪を犯したからである。12:3 戦車一千二百台、騎兵六万がこれに従った。また、彼とともにエジプトから出陣した民、すなわちルブ人、スキ人、クシュ人の人数は数えきれないほどであった。12:4 彼はユダに属する防備の町々を攻め取り、エルサレムまで攻め寄せて来た。12:5 そのとき、預言者シェマヤが、レハブアムと、シシャクを前にしてエルサレムに集まったユダのつかさたちのもとに来て、彼らに言った。「主はこう仰せられる。『あなたがたがわたしを捨て去ったので、わたしもまたあなたがたを捨ててシシャクの手に渡した。』」12:6 すると、イスラエルのつかさたちと王とはへりくだり、「主は正しい。」と言った。

シシャク一世は、歴史文献に出てくる力あるパロです。パレスチナ地方の町々を征服したことが、彼の宮の壁に描かれているとのこと。その原因をここで歴代誌の著者ははっきりと、「彼らが主に対して不信の罪を犯したから」と言っています。そして、この言葉に対して素直に、「主は正しい」と王またつかさたちが言っています。私たちは、ソロモンの祈りの中で学びました。

へりくだるといふことは、主の裁きが、たとえそれが自分を罪に定めようとも正しいとみなすことであります。自分が罪を犯したとします。神に対する罪でもありますが、法律違反を犯して懲役になったとします。そこから出てくることを願わずに、確かに自分がこの裁きを受けるに値するのだ、この裁きに服すると心で決めることができたのであれば、その人は悔い改めています。はやく牢屋から出たい、もう自由は利かないのか？と焦っているなら、まだ悔い改めていません。同じように、自分が犯した罪によって、その裁きに服し、そこにある神の憐れみを信じている時に神からの魂の癒しが与えられます。

12:7 主が、彼らのへりくだった様子をご覧になると、シェマヤに次のような主のことばがあった。「彼らがへりくだったので、わたしは彼らを滅ぼさない。間もなく彼らに救いを与えよう。シシャクの手によって、わたしの怒りをエルサレムに注ぐことはやめよう。12:8 ただし、彼らは彼のしもべとなる。わたしに仕えることと地の諸王国に仕えることとの違いを思い知るためである。」

非常に重要な御言葉です。レハブアムとイスラエルが、神に仕えることを嫌がって、他の神々に仕え

ました。神に仕えることが、あたかも束縛と受け、抑圧されるとでも思ったのでしょうか、それで神から自由になろうと思って、他の神々に走ったのです。しかし結果は逆であり、それによって諸国の王に仕えることになり、それこそが抑圧でありました。

私たちは騙されてしまいます。主に仕えることが、自分のしたいことを束縛すると考えます。いいえ、神から自由にされて自分の欲求を満たすことを選び取るならば、それこそが自分を束縛していくようになります。自分を縛りつけ、自分はそれにすべての財産とエネルギーを費やすようになり、身動きできなくなってしまうのです。神に仕えることは、自由人の行うことです。私たちは、キリストにあって律法の束縛から解放されました。そしてその自由を、純粹に神を愛し、また兄弟姉妹を愛しているから、仕えることに用いていくのです。そこには真の自由があります。

12:9 エジプトの王シシャクはエルサレムに攻め上って来て、主の宮の財宝、王宮の財宝を奪い取り、何もかも奪って、ソロモンが作った金の盾をも奪い取った。12:10 それで、レハブアム王は、その代わりに青銅の盾を作り、これを王宮の門を守る近衛兵の隊長の手に託した。12:11 王が主の宮にはいるたびごとに、近衛兵が来て、これを運んで行き、また、これを近衛兵の控え室に運び帰った。12:12 このように、彼がへりくだったとき、主の怒りは彼の身を離れ、彼を徹底的に滅ぼすことはされなかった。ユダにも良いことがあったからである。

ユダの国が数年後にはこのように低められたということ、ここがよく表しています。あれだけの金がソロモンが王の時にふんだんに使われていたのに、今はそれらのほとんどがシシャクに取られていき、今や青銅の武器の飾りで代用しています。主が願われている状態に、御霊によって保っていることがいかに難しいかを物語っています。肉のよる行いによって、主の御霊による働きがまたたくまに台無しにされてしまうのです。

「ユダにも良いことがあったからである」とありますが、列王記にはレハブアムについて良いことは書かれていませんでした。けれども、歴代誌の著者は神の裁きではなく、神に立ち返るための指針を帰還民に与えるために、列王記に書かれていないことも敢えて歴史的事実として書いています。レハブアムの例に倣って、へりくだって、今、異邦人の支配の中にあってもそこで仕えていくことで、自分たちが神の憐れみを受け、救いを受けるのだということです。

2C 主を求めない悪事 13-16

12:13 こうして、レハブアム王はエルサレムで勢力を増し加え、国を治めた。レハブアムは四十一歳で王となり、主がご自分の名を置くためにイスラエルの全部族の中から選ばれた都、エルサレムで十七年間、王であった。彼の母の名はナアマといい、アモン人であった。12:14 彼は悪事を行なった。すなわち、その心を定めて常に主を求めることをしなかった。12:15 レハブアムの業績、それは最初から最後まで、預言者シエマヤと先見者イドの言行録にしるされて、系図に載せられているではないか。レハブアムとヤロブアムとの間には、いつまでも争いがあった。12:16 レハブアムは彼の先祖たちとともに眠り、ダビデの町に葬られた。彼の子アビヤが代わって王となった。

午前に話した通り、レハブアムの生涯は「悪事を行なった」という評価でありました。それは、心を定めて主を求めなかったからです。いかがでしょうか、まだ心を定めなくて、自分は自分のしたいことをするけれども、後で主のことも忘れぬように祈る、であるとか、主との関係が他の生活の忙しさの中で最後になっていないでしょうか？

そして、「レハブアムとヤロブアムとの間には、いつまでも争いがあった。」とありますが、この南北の争いはアビヤそしてその次のアサ王の時まで続きます。ちょうど朝鮮戦争と似ていて、大きな戦いが終わっても、38度線付近で小競り合いはしばらく続いたのと同じです。領土の国境線が決まるまで収まるのはアサ王の時でした。

2A 主への叫び 13

1B 主への反逆 1-12

13:1 ヤロブアム王の第十八年に、アビヤはユダの王となり、13:2 エルサレムで三年間、王であった。彼の母の名はミカヤといい、ギブアの出のウリエルの娘であった。アビヤとヤロブアムとの間には争いがあった。

アビヤの生涯は、列王記第一では、主の前に悪を行なったとなっています。けれども、レハブアムと同じくアビヤにも、良いところがあったことを歴代誌の著者は記しています。

13:3 アビヤは精鋭四十万の勇敢な戦士の部隊を率いて戦争を始めた。一方、ヤロブアムも八十万の精鋭、勇士を率いて彼に対抗し、戦いの備えをした。

先ほど話しましたように、南北間の争いはレハブアム死後も続きました。そして今、その軍勢はヤロブアムが二倍います。

13:4 アビヤはエフライムの山地にあるツエマライム山の頂上に立って、言った。「ヤロブアムおよび全イスラエルよ。私の言うことを聞け。13:5 イスラエルの神、主が、イスラエルの王国をとこしえにダビデに与えられたこと、すなわち、塩の契約をもって、彼とその子らとに与えられたことは、あなたがたが知らないはずはあるまい。13:6 ところが、ダビデの子ソロモンのしもべであったネバテの子ヤロブアムが立ち上がって、自分の主君に反逆したが、13:7 彼のもとに、ごろつき、よこしまな者たちが集まり、ソロモンの子レハブアムより優勢となった。それに、レハブアムは若くて、おくびょうであり、彼らに対抗して自分の力を増し加えることがなかった。

アビヤは今、ヤロブアムに対峙しています。そこで彼が語ったのは神の約束です。神の約束は、イスラエルの国はダビデに与えるというものでした。そしてその契約は塩の契約であり、恒久的なものであると強く主張しました。そして、ソロモンがダビデの子でありその契約の継承者であることも主張しています。ヤロブアムは、君主に今だ逆らっている者たちであり、神に逆らっているのだということを暗に主張しています。レハブアムによって、国が分裂し、そして国力もエジプトの手の中に落ちて弱まってしまう

いました。けれども、そのような中にあってもアビヤは、ダビデへの約束にすがっています。敵がユダの国さえも倒そうという勢いを持っていたので、神の約束に堅くたって立ち向かったのです。

私たちも神の約束に堅く立って、悪魔に立ち向かっているのでしょうか？「ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。(ヤコブ 4:7)」自分が過去に犯した罪があり、その残骸が自分の人生にまだ残っているとします。けれども、主の流してくださった血潮によって、その罪は完全に洗い清められています。けれども、なおのこと悪魔はその罪を取り上げて、自分を責め立てます。そこに私たちはしっかりと、神の約束に立たないといけません。「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます(1ヨハネ 1:7)」という言葉にしっかりと立脚しなければいけません。

13:8 そこで今、あなたがたは、ダビデの子らの支配下にある主の王国に敵対して、力を増し加えようとしており、また、あなたがたはおびたしい群れをなしており、ヤロブアムが造ってあなたがたのために神とした金の子牛もあなたがたとともにある。13:9 あなたがたは、アロンの子らである主の祭司たちとレビ人を追放し、諸国の民にならって自分たちのために祭司を任命したではないか。だれでも若い雄牛一頭と雄羊七頭を携えて来て祭司職につこうとする者は、神ならぬものの祭司となったのである。

今、ヤロブアムと共にいる神と自分と共にいる神を対比しています。ヤロブアムの神はもちろん、生ける神ではありません。金の子牛です。そして、アビヤはここで祭司たちとレビ人に何を行なったかをしっかりと述べています。主の祭司たちとレビ人を追放したのです。その代わり、牛や羊を携えて最初職を購入できるという、腐敗した状態になっているのではないかと咎めているのです。

主に仕える者にとって、第一条件は主に召されているかどうか、であります。その人が選ぶのではなく、主が選ばれて、奉仕の働きに召しておられるのです。この召命の確信のない人が牧者など、教会の奉仕の働きに携わるならば、とんでもないことになってしまいます。教会の群れを見るのは、主の教会を見ることに他ならず、自分自身が主ご自身のものとなっていなければならないからです。自分ではなく、主が賜物を与えられて、その恵みによって動かされるのです。困難が待っていようと、自分の手を休ませることはないという、神からの支えはこの召しから与えられます。

そうではなく、そうした神の任命による働きと賜物をないがしろにして、自分たちだけで、あるいは自分だけで主を礼拝しようとする時に、その礼拝は神をさがめているのではなく、金の子牛と同じように、主をさがめていると言いながら偶像を拝むことになります。なぜなら、自分のしたいように礼拝できるからです。自分の願っているように礼拝するということが、まことの神、生ける神への礼拝と性質が違ってきます。

13:10 しかし、私たちの場合は、主が私たちの神である。私たちはこの方を捨てなかった。また、アロンの子らである祭司たちが主に仕えており、レビ人が仕事をしている。13:11 彼らは朝ごとに夕ごとに

全焼のいけにえを主にささげ、かおりの高い香をたき、並べ供えたパンを純金の机の上に整え、金の燭台とその上のともしび皿には、夕ごとに火をともしている。私たちは、私たちの神、主の戒めを守っている。それに反し、あなたがたはこの方を捨て去った 13:12 見よ。神は私たちとともにいて、かしらとなっておられる。また、神の祭司たちも私たちの側におり、合図のラッパを手にして、あなたがたに対し進撃の合図を吹き鳴らそうとしている。イスラエル人よ。あなたがたの父祖の神、主と戦ってはならない。とうてい勝ち目はないからである。」

アビヤは優れた言葉を言い放ちました。主が自分たちの神であります。そのように言い切ることできた理由が、祭司たちとレビ人が仕事をしているからです。主に対する礼拝奉仕を絶やすことなく行っていることを挙げています。それらは、主の命令に聞き従ったものです。すばらしいですね、私たちが信仰の戦いに打ち勝つには、このように互いに祭司としての務めを行っている時、その賜物が用いられている時に成り立ちます。礼拝を捧げ、主の命令に日ごろから聞き従っている時に、大胆に、主が自分に付いていると言うことができます。そして実際の戦いの時に、なんと軍人が先んじるのではなく、祭司たちが最前線に立ち、合図のラッパを吹き鳴らすのです。これが、人間の戦いではない、主ご自身の戦いなのだということが良く分かります。

2B ユダの勝利 13-22

13:13 ヤロブアムは伏兵を回して、この人々の背後から攻めるようにさせた。こうして、彼らはユダの正面におり、伏兵はその背後にいた。13:14 ユダが向き直ると、見よ、戦いは前後から迫っていた。それで、彼らは主に叫び求め、祭司たちはラッパを吹き鳴らした。13:15 そして、ユダの人々はときをあげた。ユダの人々がときをあげたとき、神はヤロブアムと全イスラエルを、アビヤとユダの前に打ち破られた。

人の計略は、主の前で無にされました。その力は、第一に彼らが主に叫び求めたところにありました。第二に、祭司たちがラッパを吹き鳴らしたところにありました。私たちの戦いの前線は、私たちにあるものではありません。主に叫び求めるところにあります。そしてラッパを吹き鳴らす、つまり主ご自身と天の万軍の動きにあります。私たちが、霊の戦いの中にいることをいつも思い出さないとはいけません。伝道において、自分が語れるのかそうでないのか、その勝敗の決めては祈りにあるのです。ある人は、祈りによって神が相手を降参させ、実際の伝道は分捕り物を取りに行くようなものだ、と言いました。祈りこそが、勝敗の決着をつけるのです。

これからの歴代誌の話は、このような戦いと、そしてその戦いに対抗するべく、肉の武器ではなく、主への叫びと讃美による物語を読んでいます。

13:16 こうして、イスラエル人はユダの前から逃げ去り、神はこの人々を彼らの手に渡された。13:17 アビヤとその民は彼らをおびたたく打ち殺した。その結果、イスラエルのうち、精鋭五十万が殺されて倒れた。13:18 イスラエル人は、このとき征服され、ユダ人は、勝利を得た。彼らとその父祖の神、主に拠り頼んだからである。

すばらしいです、この一言が私たちの全てです。「主に拠り頼んだ」という言葉です。

13:19 アビヤはヤロブアムのあとを追い、ベテルとそれに属する村落、エシャナとそれに属する村落、エフラインとそれに属する村落など、幾つかの町々を彼から取った。13:20 こうして、ヤロブアムはアビヤの時代には、もはや力をとどめておくことができなかった。主が彼を打たれたので、彼は死んだ。13:21 一方、アビヤは勢力を増し加えた。十四人の妻をめぐり、二十二人の息子、十六人の娘をもうけた。13:22 アビヤのその他の業績、彼の行ないとは、預言者イダの注解に記されている。

完全に主が支配されています。アビヤに主は勝利を与えられ、そしてヤロブアムは主ご自身の手によって打たれて死にます。

そして次回、アサ王の業績を見ていきます。彼にも受け継がれる、主への献身、主への礼拝と共に与えられる軍事的勝利であります。「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。(2コリント 10:4)」私たちは何をすればよいか考えめぐねますが、それよりも、主の前に留まっていることができるか？が問われます。礼拝であり、神への賛美です。